

はじめに

「京都国立博物館（以下、「京博」と略す）」は、七条通りと東大路通りの角、三十三間堂の前にあります。この地は、平安時代後期（一二世紀）、白河天皇の御所でした。鎌倉時代にはいると、鎌倉幕府が京都を治めるため、七条通りと東大路通りを境にした広い地域に六波羅政庁を設置しましたし、一六世紀後半には豊臣秀吉がこの地に方広寺を建立しました。京博の新館が建設された場所は、法住寺跡、六波羅政庁跡、方広寺跡の三つが歴史的に深く重層しております。

江戸時代初期、一七世紀のころの『洛中洛外図』をみると(図1)、五条大橋と、方広寺、その前に三十三間堂が描かれています。そして、一八世紀後半の景観は、円山応挙の『五条橋より京大仏殿を望む図』(図2)のようになります。その図に描かれている大仏殿は、

数奇な運命をたどります。地震や火災などで何度か建て替えられ、一八世紀の終わり、寛政一〇年(一七九八)ころにはこの建物も落雷で全焼します。この大仏殿のあったあたりに今の京博があります。

図3は明治初年の写真です。人力車と方広寺の石垣、回廊の一部が写っています。この立派な石垣は現在も残っています(図4)。その場所に明治二八年(一八九五)、帝国京都博物館の本館が竣工しました(図5)。設計者は片山東熊とらぐまです。

京博ができた時代の背景

明治元年(一八六八)に『神仏分離令』が布告されます。神道と仏教を分けなさいということですが、この背景には、神道を国家の宗教にしていこうという大きな流れがありました。この神仏分離令が布告されたとたん、仏教に対する排斥運動が起こります。廃仏毀釈です。廃仏毀釈の嵐はさまざま、仏像なども放りだされるという悲惨な事態が発生しました(図6、7)。方広寺の釣鐘も放置され雨ざらしになりました(図8)。この嵐は全国的に広がり、日本の大切な伝統文化が大きなダメージを受

図1 洛中洛外図屏風(部分)



図2 円山応挙筆 眼鏡絵「五条橋より京大仏殿を望む図」